

## 学位論文題名

絵画作品をめぐる言説史  
— 十七世紀フランス美学思想史の再検討 —

## 学位論文内容の要旨

本論文は、17世紀後半フランス・アカデミーにおける絵画に関するさまざまな言説が、その後の「イメージ」と「テキスト」とが結びつき成立する美術批評のプロトタイプであるとともに、今日の美学や美術史などが取りあげる主要な論点を萌芽的に含み込んでいたことを、当時の膨大なアカデミーの会議を丹念に読みほぐすことによって明らかにしようとするものである。そのために本論文は三つの課題を設定する。第一に、17世紀後半の個別の絵画作品に即した作品記述を単なる本格的な美術批評の「前史」として扱うのではなく、作品を叙述する際の多様な様態や口ぶりや語法について分析を行うこと。第二にこれらの作品記述の多くが、特定の聞き手を想定した「パロール」であることを指摘し、この仮構された「パロール」こそが、特定の絵画作品についての評価や記述を複数の話者たちの「ふるまい」の場として立ち上げ、17世紀フランスの作品論を特徴づけている点について考察すること。そして第三の課題は、そうした作品評ないしは作品記述がそれぞれ絵画作品のどの側面についてどのように言説化するのかという点に基づきながら「美術批評」や「美術史」「美学」などへと「分節化」していくのかを明らかにすることである。

第I部第1章ではロラン・フレアール・ド・シャンブレイの主著『絵画の完全さについての考え』を取り上げ、彼が論じている絵画の「諸要素」が、「幾何学的な原理」「真実ないしは真実らしさ」「礼節」という三種類の原理に立脚していることを指摘している。この三種類の原理はいずれも、具体的な絵画作品の外部ですでに優劣が定まっているような尺度として機能しており、したがって、フレアールが「諸要素」に基づきながら行う個別作品の評価には、ある種の一義性が認められるのである。たとえば、構図は幾何学的遠近法の問題としてのみ語られることで、あるいは表情や身振りの表現は画家当人の「礼節」の問題とからめて論じられることで、異論の余地のないものとして、断言されていたことを明らかにした。

第2章では画家シャルル・ル・ブランの議論を中心に、フランス王立絵画彫刻アカデミーで行われていた「会議」の記録をたどる。その結果、絵画作品の「読解」に主眼を置くル・ブラン流の作品解釈のあり方と、必ずしも「読解」を重視せず、絵画の構図や色彩に力点を置こうとする別の論者たちによる多様な解釈の存在とを、確認することができた。加えて、言語の力を重んじ、たとえば「デッサンはことばによって説明できる」とさえ考えていたル・ブランではあったが、他方、物語を「快く」示すことが問題になる際には、イメージの巧みな処理や、イメージが喚起する「観想」といった、絵画ならではの問題にも確かに踏み込んでいることが明らかにされている。

第3章は絵画理論家ロジェ・ド・ピールの言語観について、続く第4章で彼の作品記述を論じるための前段階として、一定の整理を試みている。その結果、ド・ピールが、基本的には視覚の領域である絵画作品の理解と、言語を介しての事物の理解との違いを、同時代の他の論者たちに比べても極めて明瞭に意識していたことが確認された。言語によっては踏み込むことができない絵画独自の領域は、彼の議論においては、作品の鑑賞・理解という局面だけではなく、画技を習得する場面にも及んでいた。また、特別な言語であった「詩」も、事物を再現する仕方において絵画とは異なると目されていた。

第4章ではロジェ・ド・ピールによる絵画作品の記述の分析である。「全体の印象」から出発し、次第に各部分の理解へと進むのが望ましい作品鑑賞のあり方だとするド・ピール自身の絵画論が、彼のいくつかの作品記述においても試みられていることが明らかになる。また、彼の作品記述は、作品そのものにとり代わることや、作品の優劣を厳密な意味で「証明する」ことを求めるものではなく、絵画作品を前にしてド・ピールが試みていた言説とは、語り手「私」に根拠を置く記述を積み重ね、読者を「説得する」ものだったと指摘している

第Ⅱ部第5章において、画家による創作の理想をめぐる17世紀の論者たちの見解が、「容易に」制作するという言い回しをたどることで、整理されている。そしてアンドレ・フェリビアンやド・ピールが求める「容易に」制作する画家像が、17世紀フランスの紳士論にも通底するような、身分の高さや高貴さ、優雅さといった理想にも通じるものであることが明らかにされる。たとえばド・ピールは、自らが理想とする画家ルーベンスについて語りつつ、制作しながら容易に会話を交わす画家の能力を称えていた。こうした制作の理想は、靈感や才気がほとぼしるタイプの創作場面とも無関係ではないが、他方で、制作する所作自体の優雅さにも踏み込むものであると考えられるのである。

第6章ではド・ピールの「天才」概念と「熱狂」概念を取りあげ、ド・ピールの天才論と熱狂論には、知性を保ちながら、過去の巨匠たちと一種の「会話」を交わすという側面が含まれていることを明らかにした。彼のこうした熱狂論は、17世紀の紳士論が当時の絵画論に深く関与していたことを、改めて想起させるものであることを指摘した。

第7章では、17世紀から18世紀にかけてのフランス社会で重要な意義を有していたと考えられる「会話」が、絵画を主題とした会話篇のなかでどのようなものとして描かれているのか、そして絵画理論を形成するうえでどのような機能を果たしているのか、という点について考察した。その結果、たとえばド・ピールの『会話』では、趣味をめぐる作中人物たちの議論が錯綜し、論証によってはもはや解決されえないという段階にいたるのであるが、最終的には、話者たちが会話に参加する際の態度や口調そのものの優劣が、議論の優劣を決していることが指摘されている。

第8章は会話篇に挿入された話者の発言以外の部分、いわゆる「地の文」についての整理を試みる。フェリビアンとド・ピールの会話篇で行われる作品の叙述には、特に「地の文」によって会話を「ふるまい」として描き出すという特徴を備えており。そこにおいて

話者たちは、特定の発言の仕方や声や態度をとらないながら、一連の作品群の前で互いの見解を交し合い、言うなればモノログによってではなく、複数の声が交差する場において、作品論を展開していることを指摘している。

最終の第9章ではフェリビアン会話篇には、前章で見たような「ふるまい」の場面が一時的に中断されるかたちで、個別の作品についてのモノログ的な説明がしばしば登場するのであるが、そのようなひとつの会話篇のなかに個別作品についての複数の叙述スタイルが混在していることに着目し、とりわけ絵画作品の「記述」と呼ばれる叙述方法が、会話篇の構造の中から立ち上がってくる様子が確認されている。

以上を踏まえ、本論文は「美術」と「美術批評」がそれぞれ自身の領域を確保してゆく動きは実は表裏一体のことがらであること、さらにそのような領域確定という事態の営みは歴史上のある一時点において完了したのではなく、今なお続けられていると考えるべきである、と結論づけている。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 北 村 清 彦  
副 査 准教授 谷古宇 尚  
教 授 宇都宮 輝 夫

学 位 論 文 題 名

## 絵画作品をめぐる言説史

### －十七世紀フランス美学思想史の再検討－

学位論文提出後、審査委員会が発足し、その後5回の審査委員会を開催した。第1回審査委員会では審査日程を調整し、提出論文を検討するための十分な時間確保に努めた。第2回委員会では論文内容の検討および問題点を整理し、口頭試験に向けた準備を行った。口頭試験では、概念規定の厳密さ、論理の整合性、使用されたテキストの妥当性、翻訳の正確さ、結論の正当性など、論文の細部から全体に及ぶ問題まで、約3時間にわたって十分な質疑応答を行った。第3回委員会ではこの口頭試験の結果を踏まえて、学位授与の判定を行い、審査委員会は全員一致して本申請論文に博士（文学）の学位を授与する事が妥当であるとの結論に達した。その後、主査が審査結果報告書（案）を作成し、第5回委員会でその表現等の修正を行い、審査報告書を確定した。2012年1月20日文学研究科教授会で審査結果の報告を行い、慎重に審議した後2月3日同教授会において投票の結果、本論文申請者に対する博士（文学）の学位授与が決した。

本論文は、17世紀後半フランス・アカデミーとその周辺における絵画に関するさまざまな言説が、その後の「イメージ」と「テキスト」とが結びつき成立する美術批評のプロトタイプであるとともに、今日の美学や美術史などが取りあげる主要な論点を萌芽的に含み込んでいたことを、会話編や講義録など、当時いまだ学的体裁の整っていない、しかも膨大な量のテキストを丹念に読みほぐすことによって明らかにしようとするものである。従来、美学史では18世紀後半がその学の成立および成熟期であるとされてきた。しかし本論文では、美学や美術史、あるいは美術批評などの「揺籃期」ともいえる17世紀後半に焦点を定め、素描、色彩、構図、紳士的、モノローグ、作品の価値、優劣など、これまで十分な考察なしに自明的に考えられてきた諸概念が、この時期の個々の具体的な作品記述の中から立ち現れてくる現実を鮮やかに析出することに成功した。

その学術的な成果は以下の3点にまとめられる。第一に、17世紀後半の個別の絵画作品に即した作品記述を単なる本格的な美術批評の「前史」として扱うのではなく、作品を叙述する際の多様な様態や口ぶりや語法について分析を行ったこと。第二にこれらの作品記述の多くが、特定の聞き手を想定した「パロール」であることを指摘し、この仮構された「パロール」こそが、特定の絵画作品についての評価や記述を複数の話者たちの「ふるまい」の場として立ち上げ、17世紀フランスの作品論を特徴づけている点を明らかにしたこと。そして第三に、そうした作品評ないしは作品記述がそれぞれ絵画作品のどの側面につ

いてどのように言説化するのかという点に基づきながら「美術批評」や「美術史」「美学」などへと「分節化」していく経緯を明らかにしたことである。その結果、「美術」と「美術批評」がそれぞれ自身の領域を確保してゆく動きは実は表裏一体のことがらであること、さらにそのような領域確定の営みは歴史上のある一時点において完了したのではなく、今なお続けられていると考えるべきである、というのが本論文の結論である。

とくにフレアール・ド・シャンブレイ、ロジェ・ド・ピール、アンドレ・フェリビアンらの著作は、その名は知られていても、本国のフランスですら今日取りあげられることは極めてまれであり、その翻訳を行ったことだけをとっても十分な資料的価値がある。その上でそれらのテキストを予断なく読み取り、必要かつ十分な質量の引用をもって、各章を明快な論理のもとに組み立て、全体として丁寧な仕上げになっている。

ただし取りあげたテキストの 17 世紀の思想史における位置づけがまだまだ十分に批判されているとはいえ、そのためにこれらのテキストがその後の美学や美術史、美術批評の真のプロトタイプとなりえているのかについては、若干の疑義が残る。しかしもちろんこのことは本論文の本質的瑕疵ではない。かえってこの時代における美術に関する言説の重層性の証左でもあり、今後もこの方向で研究を進めることによって世界水準の成果をあげることが期待される。